

高鍋町教育研究所

I 研究主題と副題・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 7 - 1

II 主題設定の理由・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 7 - 1

III 研究仮説・・ 7 - 3

IV 研究組織・・ 7 - 3

V 研究の実際・・ 7 - 3

研究の柱① 「めあて・課題・まとめ・振り返り」を明確化した指導案

研究の柱② 高鍋町授業づくり研修会

研究の柱③ 高鍋町 SU（スキルアップ）研修会

VI 研究の成果と課題・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 7 - 9

○ 引用・参考文献・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 7 - 10

○ 研究同人・・ 7 - 10

I 研究主題と副題

教育研究所を核として、高鍋町全体が一体となった授業力向上の取組
～研究員一人一人のスキルアップを目指した高鍋町授業づくり・SU研修を通して～

II 主題設定の理由

【 VUCA の時代に求められる教師の姿 】

数年前から、これからは VUCA の時代と言われるようになってきた。VUCA とは Volatility (変動性)、Uncertainty (不確実性)、Complexity (複雑性)、Ambiguity (曖昧性) の頭文字を並べた造語であり、「予測困難な」という意味である。新型コロナの流行により、教育現場においても更に「将来の予測が困難な状態」となっている。新学習指導要領の「生きる力」とは、まさしく「変化する社会を柔軟に生き抜く力」に他ならない。では、これからの社会を担う子どもたちを正しく導く教師に求められるものとは何だろうか？教育現場においては、ICT 活用を含む多様な教育活動への対応が必要となり、「働き方改革」で教師の多忙感解消が強く打ち出されている。宮崎県においても、教員志望者の減少や40歳代から50歳代の教職員が全体の約7割を占めるいびつな年齢構成が続いており、近年、特に現場における OJT の必要性が求められるようになってきた。このような状況により、校内研修を含む職員研修の在り方について、見直しが図られている。また、多くの市町村に設置されている「教育研究所」の存在意義を、再検討する時期に差し掛かっている。本研究においては、「誰のため、何のための研究か」の原点に立ち戻り、昨年度から、研究員一人一人のスキルアップに留まらず、町内すべての教職員に向けて研修内容の質的転換を図ってきた。

【 本町及び高鍋町教育研究所の実態 】

高鍋町は宮崎県の中央部に位置し、面積では県内で最も小さな自治体である。西都・児湯地区の中核として、行政・教育・商業などの機能が狭い地域に集中するため、ついた呼び名が「コンパクトシティ高鍋」である。また、「歴史と文教の城下町」とも呼ばれ、高鍋藩主の秋月種茂公が創設した「明倫堂」は、多くの優秀な人材を輩出している。本町の教育研究所の運営方針の中に「研究推進にあたっては、実践過程を重視し、その成果を踏まえ児童生徒の実態・変容を含めたきめ細かい記録をするように配慮する」「共同研究の成果を、教育研究報告書及び高鍋町教育職員研修会等において発表する」とある。つまり、教育研究所の研究は町内の児童生徒に還元し、本町すべての教職員の授業力向上に結び付くことを目指している。

今年度の研究員のメンバー（8名）は、小学校が若手教員、中学校は中堅・ベテラン教員の構成になっている。校種や担当教科の違いを踏まえて、「授業力向上」のテーマに基づき、2つの研修（高鍋町授業づくり・SU研修会）を柱として研究を進めていくことにした。「高鍋町授業づくり研修会」においては、毎回、研究員2名が自分の授業実践を動画で報告し、研修参加者全員で協議を行う。「高鍋町SU（スキルアップ）研修会」では、各分野から専門の講師を招き、町内すべての教職員を対象に講義や演習を行うものである。

本町では3年前より「高鍋町小・中学校教科・領域別部会」（以後、「教科・領域別部会」とする）を設置し、小中9年間を見通した学習内容や指導方法等について、町内4校の小・中学校の全教職員がそれぞれの教科・領域に分かれて研究を進めてきた。各教科のみならず、「道徳部会」「養教部会」や「コグトレ・LD部会」を含む合計10の部会で研修を進めてきた。これまで同様、教育研究所としてもこれらの部会に積極的に関与し、各部会の研修が高まる支援を行っていきたい。また、本町4校すべての校内研修テーマが「授業力向上」であり、研究員一人一人の授業力向上にとどまらず、最終的に町内の教師全員が自ら教材研究や教材開発に取り組もうとする意欲を喚起する役割を、昨年度以上に果たしていきたい。また、本町教育研究所が研究の核となり、「授業力向上」に関する情報提供、町内の先生方の悩み（授業における）解消の受け皿となることを目指したい。

【 「高鍋町授業づくり研修会」における3つのテーマ 】

○ テーマ① 各教科の「見方・考え方」を働かせた授業づくり

「見方」とは、教科で身に付ける知識・技能等を統合および包括する「キーとなる概念」であり、「考え方」とは、教科ならではの認識や思考、表現の「方法」のことである。子どもがそれまでの学習等で身に付けた「概念」や「方法」が整理されたものが「見方・考え方」であり、子どもはこれらを働かせることによって「深い学び」が期待する教科らしい問題解決を進めることが可能になる。

（「見方・考え方」の理解とこれからの教科等の学びの在り方 島根県立大学 齊藤一弥氏 ）

新学習指導要領に示された各教科の「見方・考え方」を働かせた学習は、主体的・対話的で深い学びにつながるものである。各教科の特性を生かしながら、教師主導の知識注入型の授業ではなく、学習者である子どもを主体にした授業への転換が望まれる。また、子どもにとっても学び進む方向がはっきりしたものになり、1時間ごとの授業で扱われる学習内容に連続性や関連性が見えるようになり、各教科の大切な概念の理解が期待できる。

○ テーマ② ICT を効果的に活用した授業づくり

「情報活用能力」は、世の中の様々な事象を情報とその結び付きとして捉え、情報や情報技術を適切かつ効果的に活用して、問題を発見・解決したり自分の考えを形成したりしていくために必要な資質・能力である。具体的に捉えれば、学習活動において必要に応じてコンピュータ等の情報手段を適切に用いて情報を得たり、情報を整理・比較したり、得られた情報を分かりやすく発信・伝達したり、必要に応じて保存・共有したりといったことができる力である。

（ 教育の情報化の手引き-追補版-（令和2年6月）第2章 文部科学省 ）

GIGA スクール構想に伴い、一人一台のタブレットが本町の子どもたちにも支給された。しかし、教員側のスキルも含めて効果的な活用が期待できるのは、まだまだこれからである。変化する社会への対応として、「情報活用能力」の育成は急務であり、だれ一人取り残すことなく、小学校から段階的に情報スキルを積み上げていくことが望まれる。

○ テーマ③ 内容のまとまりを意識した授業づくり

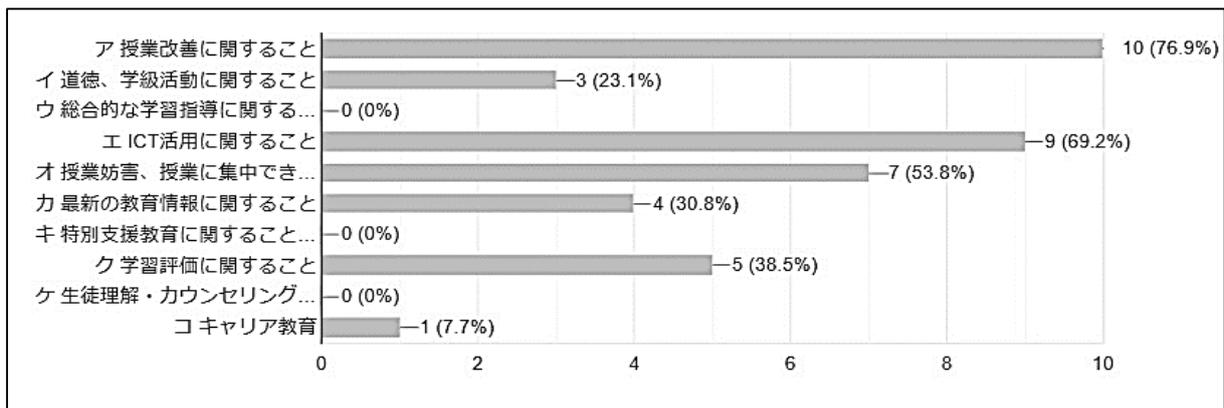
「内容のまとまり」とは、学習指導要領に示す各教科等の「第2 各学年の目標及び内容 2 内容」の項目等を、そのまとまりごとに細分化したり整理したりしたものです。つまり、各教科等は「内容のまとまり」ごとに育成を目指す資質・能力が示されています。よって、「2 内容」の記載はそのまま各教科等の学習指導の目標となりうるものとなっています。

（ 教育の情報化の手引き-追補版-（令和2年6月）第2章 文部科学省 ）

各教科における「指導と評価の一体化」に示されているように、これからの学習においては1時間ごとの授業を統括する形で、内容のまとまりを意識した授業を行うことが求められている。つまり1時間ごとの細かな評価のみに留まるのではなく、内容のまとまりとして1つの単元の中で様々な学習活動を展開し、3観点に従って子どもたちの学びを客観的に評価していく。評価の面からも、このような学習の流れを意識する必要がある。

【 「高鍋町SU（スキルアップ）研修」のねらい 】

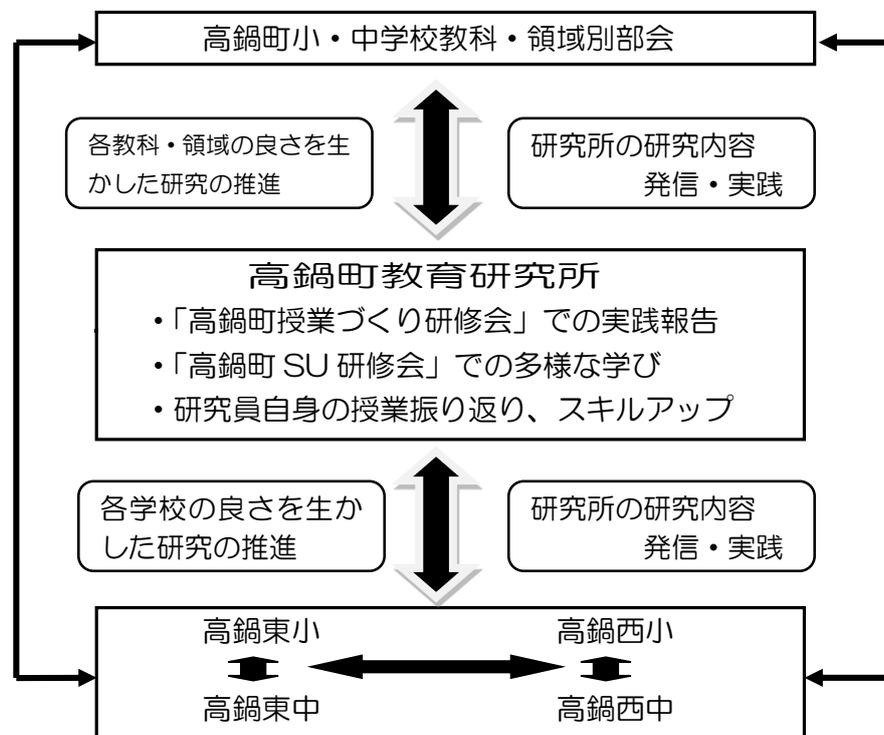
これからの教師には、変化・多様化する社会への対応が求められ、これまで以上の教育的スキルが必要となってくる。しかし、すべてのスキルを完璧に習得することは、時間的な余裕を含めてかなり無理がある。また、実際に教育研究所で行われる研修が、研究員それぞれのニーズに沿ったものであったのかは疑問が残る。そこで、研究員全員に複数回答で、受講したい研修テーマをアンケートしてみた。その結果、以下のグラフのように、「授業改善」「ICT 活用」「授業中の問題行動への対応」「学習評価」等のニーズが高いことがわかった。今年度の高鍋町SU研修では、できる限り研究員の希望に応えること、また、講師としては、町内における専門性が高い人材を講師とし、本町におけるベテラン教員の活躍の場としても位置付けた。その際、小中の人材にとどまらず、広く高等学校の教員や一般の人々からも学びを提供していただくこと、町内すべての教員へ参加を呼びかけることに配慮した。



Ⅲ 研究仮説

2つの研修（高鍋町授業づくり・SU 研修会）を中心として、研究員一人一人が自分の授業を振り返りスキルアップを目指すことで、研究所を核として町全体が一体となった授業力向上の取組が期待できるであろう。

Ⅳ 研究組織



Ⅴ 研究の実際

今年度の研究については、前述のように「高鍋町教育研究所」をいかに有益なものとするか。研究員一人一人のスキルアップ、そして、「研究員をやってよかった」という達成感を高めることを第一の目標とした。二つ目に「高鍋町授業づくり研修会」を研究員の実践報告、そして、町内の先生方に身近なものとし、各学校での授業研修の材料として位置付けてもらうことにした。また、研究員や町内の先生方のニーズに応える「高鍋町 SU 研修」を計画した。この2つの研修と「教科・領域別部会」及び各校の校内研修がリンクできるように心がけた。このような主旨のもとで、より具体的で日々の授業に生かせるような研修内容を考えた。研究の柱は大きく3つである。

【 研究の柱① 】 「めあて・課題・まとめ・振り返り」を明確化した指導案

○○科学習指導案(○年○組)「単元名・題材名」 指導者 ○○○○	
A	ねらい <ul style="list-style-type: none"> ・目的と手立てを明らかにして、教師の立場で提示します。 ・「～理解させる」「～考えさせる」などの記述にします。
B	めあて <ul style="list-style-type: none"> ・ねらいを生徒の立場で示したもので、本時の学習の見通しを持たせます。 ・「～調べよう」「～しよう」などの記述にします。(例)信長の天下統一を見ていこう
C	課題 <ul style="list-style-type: none"> ・この時間に解決すべき事柄を示します。(例)なぜ、信長は天下統一できたのか？ ・「なぜ～なのか」「どうしたら～できるか」などの疑問の形で記述します。
D	展開 <ul style="list-style-type: none"> ・本時の学習の流れを、生徒の立場で簡潔に示します。 ・「～つかむ」「～まとめる」「～考える」などの記述にします。 ・生徒の実態に合った学習の流れになるように気をつけます。 ・教える場面、話し合う場面、考える場面などを明確にします。 ・指導内容を精選し、わかりやすくテンポの良い授業を心がけます。
E	まとめ <ul style="list-style-type: none"> ・本時の課題に対する答えや結論とします。(例) 信長は～ ・「課題」に対する整合性を持たせます。
F	振り返り <ul style="list-style-type: none"> ・本時の学習を生かして、自分自身の解釈や思い、次時以降で学びたいことや友達の意見の良さなどを記述できる内容とします。(例) 私は～

上記の指導案形式は、平成30年度の重点支援実践報告会（高鍋西中学校）の際に使われたものを一部変更したものである。めあてと学習課題の違いやまとめや振り返りをどのように行えばよいかを明確に示している。大分県教育委員会が提示したものをベースに、独自の工夫を加えてある。昨年度から授業づくり研修会の指導案はこの形式で作成するようにしている。基本的にこの形式は1時間完結型のスタイルである。この指導案で授業を構築する場合の留意点を以下に示す。

- ・ 授業において一番大切なことは、A（ねらい）の達成である。子どもたちが活発で生き生きする授業であっても、ねらいがずれて達成できないようであれば、授業としては成立しない。B（めあて）はA（ねらい）を子どもの目線におとしたものであり、本時の学習内容の見通しを示すものである。 A → B （子どもの立場で示す）
- ・ C（課題）は本時で解決すべき事柄を示す。BとCは明確に区別する必要があり、E（まとめ）はCの答えや結論となる。 C → E （課題の答えや結論を示す）
- ・ D（展開）においては、宮崎県教育委員会の「4+4のチェックポイント」を意識して、学習内容の精選、発問・指示の明確化等に気を付ける。 D（4+4のチェックポイント）
- ・ F（振り返り）は、本時の学習内容をもとに、「今日、新しく気づいたこと」「頑張ったと思うこと」「もっとこうしかったと思うこと」「次の時間に頑張りたいこと」など、子どもの視点に立って、教師が本時で最も振り返らせたいことを明確にし、視点を与える必要がある。 F（本時の学習内容を生かして、自分の立場で振り返らせる）

上記の留意点に配慮しながら、特にB（ねらい）とC（課題）、E（まとめ）とF（振り返り）の違いを、教師自身がしっかり把握しておく必要がある。また、「指導と評価の一体化」が求

められる中で、内容のまとまりを意識した単元ベースの授業への転換が図られている。このことを受けて、今後は1時間完結型の授業にこだわる必要はなく、生徒を主体とした柔軟な授業スタイルを展開していく必要がある。

大切なことは、型にこだわるのではなく、教科の特性や単元の展開、本時のねらい等にに応じて適切に「めあて」「課題」「まとめ」「振り返り」を設定することです。型にとらわれると授業が硬直化してしまうおそれがあります。児童生徒の思考の流れにそった、本当に力を付けられる展開はどうあればよいのかを考えることが大事です。(平成30年度 新大分スタンダード説明資料)

【 単元を意識した学習指導案の例 第2学年 地理的分野(関東地方) 】

社会科学習指導案(2年2組)「関東地方～東京は本当に住みやすいのか?～」 指導者 染矢直樹(第5グループ)	
ねらい	日本の諸地域における本単元(関東地方)では、主題②「人口、都市・村落」に主題④「交通・通信」を関連付けて探究学習を進めていく。単元の導入にあたる本時では単元を貫く学習課題を設定し、学習の見通しをもたせることがねらいである。
めあて	関東地方について学習していこう(単元の導入)
課題	東京は本当に住みやすいのか?(単元の学習課題)
展開	① ご当地怪獣を使って、関東地方の都道府県を確認する。 ② 関東地方の都道府県で人口が多い順番を、白地図に色付けする。※ ③ 「住みやすい都市ランキング1位」の都市を予想する。※ ④ 単元の学習課題「東京は本当に住みやすいのか?」を設定する。 ⑤ 単元の学習課題に対する自分の考えを数値化する。※
※タブレットを活用した学習場面	
まとめ	世界の中で東京は住みやすい都市と認められている。単元において都市機能の長所・短所を学習していく中で、新しい事実(知識)を獲得し、自分なりの考えを練り上げていくことが求められる。
振り返り	学習課題に対する自分の考えが、単元の最後にどのように変化するだろうか?

上記は地理的分野(関東地方)の指導案である。第1時において、単元を貫く問い(学習課題)を設定することがねらいである。そのため、授業の後半部分で単元の学習課題を設定する流れとなっている。単元の学習課題「東京は本当に住みやすいのか?」について、単元の中で何度も生徒に問い直し、自分の考えがどのように変化したかを、ロイロノートを使ってポートフォリオとして記録していく。また、0%(住みにくい)から100%(住みやすい)の数直線を思考支援ツールとして活用し、単元の最後に数値の変化を確かめながら自分の考えをまとめる。下記の生徒のように、東京に対する印象は学習が進むうちに変化している(初め20%→ま

0% = 住みにくい 100% = 住みやすい 初め(20%) → まとめ(40%)

「東京は人口がとても多く、自然災害で混乱が生じたり、治安もあまり良くないという悪いところがある。しかし、東京に関する学習をしていく中で、交通整備(東京湾アクアライン・地下鉄・高速道路など)が整っており、物が多く集まるため、買い物もしやすいという良さもたくさん分かったから。」

まとめ40%)。これからの学びにおいては、「自分が何を学んだのか」「この学びをどう生かしていくか」を自ら意識する必要があり、単元を通して学習を進めることは意義深い。また、指導案の※はタブレットを活用させる場面である。GIGAスクールを進める意味からも、授業のどの場面に位置付けるかを意識したい。

【 本単元のまとめ「東京は住みやすいのか?」 】

【 研究の柱② 】 高鍋町授業づくり研修会

研究員全員が自分の授業動画を撮り、授業の主旨や成果・課題について報告する研修会である。平成30年度に実施した経緯があるが、昨年度から各学校へ実施日等を通知し、研究員以外の参加者が参加しやすい状況をつくった。それぞれの担当の発表には、担当校の先生方の参加が多く見られた。特に、研究員の授業力アップに役立つ研修であったと考える。

第1回	6月16日(水)	担当・・高鍋西中学校		
		・ 中学1年生 道徳「努力したものが勝つとは限らないが」	染矢直樹	指導教諭
		・ 中学1年生 英語「What do you～?を使って」	増田麻衣	教諭
第2回	7月30日(金)	担当・・高鍋東中学校		
		・ 中学2年生 数学「一次関数(単元導入)」	日高憲一郎	教諭
		・ 中学1年生 理科「いろいろな物質とその性格」	大津 緑	教諭
第3回	9月15日(水)	担当・・高鍋東小学校		
		・ 小学6年生 社会「武士による政治の始まり」	江川将司	教諭
		・ 小学4年生 体育「多様な動きをつくる運動」	河野要世	教諭
第4回	11月 5日(金)	担当・・高鍋西小学校		
		・ 小学1年生 道徳「二わのことり」	山下ちゆき	教諭
		・ 小学3年生 国語「つたわる言葉で表そう」	川口姫歌	教諭

授業づくり研修会については、授業や発表内容を町内の先生方や保護者に伝えるため、発表した学校が担当者となり、「高鍋町教育研究所便り」を作成した。自分の授業や発表を振り返るだけではなく、研究所便りを作成するスキルも身に付けることを目的としている。研究所便りでは、行った授業の概要や視点等を示した。今年度の「高鍋町授業づくり研修会」のようすを、毎回の「研究所便り」を使って紹介する。

(1) 第1回 高鍋町授業づくり研修会(担当 高鍋西中学校)

第1回 高鍋町授業づくり研修会(高鍋西中)の報告をいたします。

こんにちは。先日の「教科・領域別部会」でお知らせさせていただきましたが、6月16日(水)に高鍋西中学校(被服室)において、「第1回 高鍋町授業づくり研修会」を実施いたしました。勤務時間外ではありましたが、小中学校の先生方、そして、教育実習生を含めて25名の参加がありました。活発な協議を含めて、とても充実した研修となりました。



○ 染矢 直樹 指導教諭

1年 道徳 「努力した者が勝つとは限らないが・・・ ～ 第97回 箱根駅伝 ～」

○ 増田 麻衣 教諭

1年 英語 「What do you～?を使って、インクで汚れた時間割を復元しよう」

【 参加していただいた先生方の感想 】

- ・ 授業の動画を通して具体的な姿が見られたので、非常に参考になりました。特に、生徒がとても元気に楽しそうに授業を受けている姿が印象的でした。
- ・ 道徳では、教材の選び方や授業の進め方など参考になった。英語では、他教科の授業の

工夫などなかなか参観できないので、イキイキした生徒の活動をさせる様子を見て勉強になった。

- ・ 初めて参加しましたが、大変有意義な時間となりました。次回も参加させていただきたいと思います。ありがとうございました。
- ・ 時間外というのがどうしても参加者が少ないのかなと思った。必要と思うかどうかも関係していると思うが、こういう機会は本当にありがたい。自分も教材研究を頑張らないといけないと思った。

(2) 第2回 高鍋町授業づくり研修会 (担当 高鍋東中学校)

第2回 高鍋町授業づくり研修会 (高鍋東中) の報告をいたします。

こんにちは。先日の「教科領域別部会」でお知らせいただきましたが、7月30日(金)に高鍋東中学校(多目的室)において、「第2回 高鍋町授業づくり研修会」を実施しました。今回は、夏季休業中ということもあり勤務時間内で、小中学校の先生方で20名の参加がありました。活発な協議を含めてとても充実した研修になりました。



- 日高 憲一郎 教諭
2年 数学「一次関数：ICTを活用した効果的な授業の在り方」
- 大津 緑 教諭
1年 理科「いろいろな物質とその性質：探究的な学習の仕方」

【 参加していただいた先生方の感想 】

- ・ ICTの活用方法の具体例を知ることができたから、とても勉強になりました。
- ・ ICTの取組を見ることができ、自分の学習にも取り入れたいと思いました。
- ・ タブレットを用いた学習方法や小中の学習内容の繋がりの大切さや重要性を感じました。大変勉強になりました。
- ・ 教師生徒共に授業においてタブレットを使用することに慣れており、それに至るまでの努力が見えました。失敗しながらでも、まずは使ってみることが大事だと感じました。テストの正答が瞬時にグラフ化されるのはとても魅力的です。
- ・ 実験の流れから自分たちで考えることで生徒の実験へのモチベーションが高まるだろうと思いました。小中の重なりを把握したうえで、それを授業でどのように生かしていくのかを知りたいです。

(3) 第3回 高鍋町授業づくり研修会 (担当 高鍋東小学校)

第3回 「高鍋町授業づくり研修会」の報告をいたします。

暑さも和らぎ、過ごしやすい季節になってきました。高鍋町の小中学校では、新型コロナウイルス感染対策を徹底しながら体育大会や運動会に向けて日々練習に励んでいます。保護者、地域の皆様には、今後も学校教育や学校行事へのご理解とご協力をよろしくお願いいたします。さて、今年度の高鍋町教育研究所におきましては、研究員のスキルアップ、そして、町内の全職員の授業力向上を目指して、4回の「授業づくり研修会」を計画しております。第3回目として、9月15日(水)に、高鍋東小の研究員2名が実践報告をいたしました。その一部を紹介いたします。日々の参考になれば幸いです。

○ 6年 社会 「武士による政治のはじまり」

発表者 江川 将司 教諭

- ・ 武士がどのように全国に勢力を広げ、表舞台に立ったかを ICT を用いて調べた。
- ロイロノートの活用方法や資料の活用について、先生方から助言をいただき、ICT を利用した授業について理解を深めた。



○ 4年 体育 「多様な動きをつくる運動」

発表者 河野 要世 教諭

- ・ タブレットやSK プラスを活用し、児童が楽しみながら、多様な動きを学習していくことを目的とした授業を行った。
- タブレット使用後の児童の動きが目に見えて良くなったことから、体育でも ICT を用いた授業が効果的であることが分かった。また、専門的な助言をいただき、指導力を高めることができた。

(4) 第4回 高鍋町授業づくり研修会 (担当 高鍋西小学校)

「第4回 高鍋町授業づくり研修会」(高鍋西小)の報告をいたします。

冷気が一段と深まり、冬の訪れを感じます。各学校におかれましては、新型コロナウイルス感染対策を徹底しながら、日々授業や学校行事等に励まれていらっしゃると思います。さて、今年度の「高鍋町教育研究所」の活動として、研究員のスキルアップ、そして、町内の全職員の授業力向上を目指して、年間4回の「高鍋町授業づくり研修会」を実施しております。第4回目として、11月5日(金)に、高鍋西小の研究員2名が実践報告をしました。その一部を紹介します。日々の授業の参考になれば幸いです。

○ 1年 道徳 「二わのことり」

(発表者) 山下 ちゆき 教諭

- ・ まだ自分の気持ちを文章にできない1年生でも、道徳の授業で気持ちを表現できるように、心情メーターの活用やワークシートの工夫などを取り入れて、指導を行った。
- これらの手立てにより、児童が自分の気持ちを自由に表現できたり、教師側が児童それぞれの気持ちの度合いを知れたりする成果が見られた。



○ 3年 国語 「“つたわるコツ” に気付かせる作文指導の提案

～デジタルとアナログを併用して～

(発表者) 川口 姫歌 教諭

- ・ 単元の中で適宜デジタル(ロイロノート)とアナログ(ノートや付箋・原稿用紙)を使い分けて、作文指導を行った。今まで、「うれしかった・楽しかった」という表現に留まっていた作文の内容を改善するために、“つたわるコツ”を意識できるように指導を行った。
- 作文の下書きを、デジタルを使用して書き上げることで、文字の削除や挿入等の推敲がしやすいと児童が感じていた。コツを提示することで、児童の表現力が大幅に向上した。



【 研究の柱③ 】 高鍋町 SU（スキルアップ）研修会

多様な講師の指導により、多分野の講義・演習を受けることで、研究員の見識を深め、日々の授業づくりに役立てる4回の研修を計画した。講義・演習のテーマは基本的に講師が決め、最後に質問や協議の時間を設定した。昨年度同様、研究員だけではなく、事前に町内の先生方に案内し、自由に参加できる体制を整えた。

第1回	7月 8日（木）	講師 幸津紀子 教諭	（高鍋西中学校）
→ 日常の話し言葉・書き言葉について ～ 中学校の国語の文法を基本として ～			
第2回	10月14日（木）	講師 吉行順一 指導主事	（高鍋町教育委員会）
→ 高鍋町のGIGAスクール構想 ～ 「アート思考」鑑賞を通して ～			
第3回	10月28日（木）	講師 三浦章子 指導教諭	（高鍋高等学校）
→ 教科指導における探究学習の現状と評価 ～ 高等学校の国語科指導 ～			
第4回	11月25日（木）	講師 株式会社 スプリックス	（オンラインを使って）
→ CBTについての説明・質疑 ～ コンピュータ上で試験を行う方法について ～			

コロナ禍であり、また、勤務時間外での開催、学校業務の多忙化により、参加される先生方の数が少なかったのは残念であったが、基本的に高鍋町内の先生方を講師に招き、各分野の専門的な講義や演習をしていただいたことは、大変に意義深かった。また、第4回目においては、ズームを使ったオンラインの研修を行い、これからの学習スタイルの一端を確かめることができた。本町では夏休み明けに、各校にロイロノートを導入し、一人



【 高鍋町 SU 研修会の様子 】

一台タブレットの学びに対応できるように準備していった。通信環境の整備、ロイロノートの効果的な活用方法、他校とのタブレットを使った交流など、様々な課題を研究所の研究員が中心となり、各校に広げていく役割を果たした。課題として教育研究所内での通信環境の整備は急務であるが、今後、更にGIGAスクール構想に基づく「ICTを活用した新しい学び」に、研究所が中心となって取り組んでいく必要があることを痛感している。

VI 研究の成果と課題

本町の教育研究所の目的は、高度な理論習得や実践を目指すのではなく、研究員及び町内の先生方の日々の授業に役立つ具体的で実践的な研修をこつこつと続けていくことである。3年前からこの研修スタイルを少しずつ進めていき、昨年度からこのスタイル（高鍋町授業づくり研修会・SU研修会）で行っている。今年度は昨年度までの反省を生かし、授業づくり研修会の発表テーマを絞り、SU研修会の内容をより具体的なものとして計画した。実施時期や時間、参加者数の問題など、十分に目的を達成できたか自信はないが、限られた時間の中で意味ある研修が実施できたと自負している。最終的に町内の先生方、研究員に今年度の取組を振り返っていただき、アンケート結果をもとに今年度の成果と課題を明らかにした。

○ アンケート結果①（ 町内の先生方 69名の集計より ）

1 研究所の研究内容は伝わりましたか？

とても当てはまる 18% 当てはまる 52% やや 23% 当てはまらない 7%

- 2 ねらいに沿った研修内容だったと思われませんか？
 とても当てはまる 27% 当てはまる 52% やや 17% 当てはまらない 4%
- 3 研修会に参加されようと思われましたか？
 とても当てはまる 12% 当てはまる 33% やや 44% 当てはまらない 11%

【 ご意見・要望 など 】

- ・ 子どもたちのために、一人一人の研究員の先生方が意欲的に授業力向上に一生懸命取り組まれているのが、とてもよく伝わってきました。
- ・ 報告等を読ませていただき、大変刺激になっています。時間がなくなかなか研修会には参加できませんでしたが、教師として常に探究心を持って努力していくことが大切だということ、先生方の姿を見ていつも感じています。

○ アンケート結果②（ 研究員 8 名の集計より ）

- 1 高鍋町授業づくり研修会は、自分にとって役立ったと思いますか？
 - 2 高鍋町 SU 研修会は、自分にとって役立ったと思いますか？
 - 3 来年度の研究スタイルは、今年度を継続する形でよいでしょうか？
- 1・2・3すべての項目について、全員「とても・当てはまる」の回答であった。やはり実践的な内容であること、研究員自らが資料を作成して報告するなど、1年間、一人一人の存在感と達成感が高められる研修内容であったことがわかる。
- 【 1年間、研究員を務めた感想及び町内の先生方へのメッセージ 】
- ・ 高鍋町教育研究所は、形式にとらわれず、教員の指導力向上に直接つながるような研修を工夫しています。毎回確実に「明日の授業に生かせるアイデア」という「お土産」を持って帰ることができます。今年度研究員になることができ、本当に良かったです。

アンケート結果①②より、今年度の研修内容が、ある程度は町内の先生方に浸透し、研究員自身のスキルアップにしっかりつながったことがわかる。研修がすべて勤務時間外であり、参加したかったが都合によりできなかつたとの声を多数いただいた。今後、改善できる点を検討しながら、更に本町の教育研究所の存在意義が高まるように研鑽を積んでいきたい。

【 引用・参考文献 】

- | | |
|-------------------------------|--------------|
| ・ 「平成 30 年度 新大分スタンダード説明資料」 | 大分県教育委員会 |
| ・ 「授業を磨く」 | 田村 学 東洋館出版 |
| ・ 「シンキングツールを学ぶ」 | 杉山 浩二 ロイロノート |
| ・ 「指導と評価の一体化」のための学習評価に関する参考資料 | 国立教育政策研究所 |
| ・ 「令和 2 年度 教育研究報告書」 | 高鍋町教育研究所 |

【 研究 同 人 】

研究所所長	川上 浩	島埜内 遵（高鍋町教育長）	研究指導員	黒木 俊和	
教育対策監	池澤 寛之		指導主事	吉行 順一	
高鍋東小	江川 将司	河野 要世	高鍋西小	川口 姫歌	山下 ちゆき
高鍋東中	日高 憲一郎	大津 緑	高鍋西中	染矢 直樹	増田 麻衣